



一、親鸞聖人と浄土真宗（一） —親鸞聖人の人ところろ—

誕生と出家

浄土真宗を開かれた親鸞聖人は、平安時代の末にあたる承安三（一一七三）年五月二十一日（旧暦四月一日）、京都の東南、日野の里（京都市伏見区）にお生れになりました。

父は日野有範といわれて藤原氏の末流の出身であり、皇太后宮大進でありましたが、のちに出家して三室戸（日野の南）に身をひそめられたようです。また、母は吉光女という女性であったとも伝えられていますが、史実を明らかにする確かな資料は残されていません。

おもえば、聖人がお生れになり、生きられた時代とは、特にその幼年期から青年期にかけては、日本の歴史の流れが大きく転換していった時代でありました。すなわち、藤原氏を中心として長い間つづいた貴族政治が、武家政治にかわろうとしていく激しい動乱のときであったのです。

ところで、聖人がお生れになった承安三年は、「保元の乱」につづく「平治の乱」で平家が政権をとってから十四年目にあたり、武士の台頭が最も著しいときでした。

ですから、親鸞聖人の流れである藤原氏一門の苦悩は深く、日野家にもその波紋は少なくなかったでしょう。それは、父の有範公、そして聖人をはじめ四人の弟さま方がすべて出家しなければならなかったという経緯からして、いかに苦渋にみちた現実であったかを告げています。しかもそれは、この時代の貴族の間で信じられていた「一人出家すれば、九族天に生れる」というような、一門の繁栄を祈願するといった風習によるものとは、まったく裏腹なできごとでありました。

このような貴族から武士への政権交替にともなう戦乱は、当時、日本の各地であいついで、多くの不幸をもたらしていました。そのうえ、聖人が四歳の春（安元二年・一一七六）と七歳の秋（治承三年・一一七九）には大地震がおそい、また、五歳の春には、京都市中の三分の一が焼け野原と化した大火にみまわれています。あるいは養和元（一一八一）年には大飢饉がおそい、栄華のよそおいの都路は、死人の臭いで通ることができなかつたと伝えられています。うちつづく戦乱とたび重なる天災地変や疫病の流行

に、人びとは不安とおののきのなかで生活をおくっていたのです。

そのような騒然とした苦悩の時代に生きられた聖人は、大飢饉の年、つまり養和元（一一八一）年の春、九歳のときに、伯父の範綱公にみちびかれて慈円僧正のもとで得度の式を受け、範宴と名を改められました。

ところで、聖人の得度の師と伝えられる慈円（慈鎮）という人は、現在でいう総理大臣にあたる関白の要職についた九条兼実の実弟であり、比叡山の延暦寺を統率するところの天台座主を四度もつとめた実力者でありました（ただし、その後の親鸞聖人のことばや書物の中には、「慈円」という名前は一度も出てこないことは、心にとどめておきたいものです）。

おもえば、動乱の現実のただ中であって、範宴と名のるこの少年の出家の動機とは、いったい何であったのでしょうか。それこそ、「この世とは、いったい何なのか。人間がこの世に生れ、生きるとはどのような意味があるのか。人生の真の目標とは…」ということではなかったでしょうか。

目の前に展開する地獄絵のただ中で、このような、人間であるが故にいだかなければならない悩みとその解決の道を求めて、範宴は比叡の山へ登って行ったのでした。

道を求めて

八世紀末に伝教大師最澄（七六七～八二二）によって開かれた比叡山は、このころ天台教学のみならず密教・禅・戒律をも融合し、日本仏教における最高の学府であり、修行の道場でもありました。

山は、東塔・西塔・横川の三塔からなり、それぞれに多くの僧院をもち、たくさんの僧侶が集まっていました。その僧侶の身分は、学生・堂衆・堂僧の三つに分かれていたようです。すなわち、学生とはもと貴族や殿上人の出身者で、小僧都から僧都、やがては天台座主へと登ることのできる、いわば出世コースにいるエリート集団であります。また、堂衆とは、その学生が比叡山に登るときに連れてきた近習が出家して法師となったもので、比叡山の僧侶や堂舎などを他から守るために武装していました。しかし、真剣に道を求める心はうすく、いわゆる「叡山の荒法師」などと呼ばれるようになった僧兵の集団であります。

そして、堂僧というのは、常行堂で不断念仏にはげみ、ひたすら真摯に道を求めて修行する僧のことです。けれども比叡山におけるその地位は、けっして高いものではありませんでした。

いま範宴と名のつたその人は、まさにこの堂僧であったのです。

すなわち、大正十（一九二一）年、西本願寺の宝庫から発見された聖人の内室である恵信（尼さまの書簡（「恵信尼文書」）に、

殿（親鸞聖人のこと）の比叡の山に堂僧つとめておわしましける

（『註釈版聖典』八一四頁）

としたためであるところから、比叡山における聖人の身分は、常行堂の堂僧であったことが明らかになりました。

ところで、この常行堂とは、天台の修行法として定められている四種三昧の一つ常行三昧を修する道場で、このころ比叡山には、東塔・西塔・横川の三塔それぞれにこの常行堂がありました。そこで修する常行三昧とは、身は常に阿弥陀仏の像のまわりを廻りつづけながら、口には常に阿弥陀仏の名をとえ、意（心）には常に阿弥陀仏のおすがたを念ずるといった、まさしく、身口意の三業をもって行なうきわめて厳しい修行であり、しかも聖人のころは、十七日間それを修することになっていました。

いま、親鸞聖人が勤められたのは、聖人のご生涯を伝える『親鸞聖人伝絵』に、

楞嚴横川の余流を湛へて、ふかく四教円融の義にあきらかなり

（『註釈版聖典』一〇四三頁）

と明かされているところからすると、三塔の中でも最も奥まった横川の常行堂ではなかったかとうかがわれます。横川といえば、「正信偈」に「源信広く一代の教を開きて、ひとへに安養（浄土）に帰して一切を勧む」（『註釈版聖典』二〇六頁）とあり、「山の念仏」をすすめられた源信和尚のことが偈れますが、とすれば、聖人は浄土教と関係の深い横川の首楞嚴院（和尚の住しておられた所）の流れをくみ、天台の教学

を研鑽されたということになります。

それにつけても、藤原氏のわかれであり、しかも慈円という実力者にいち早く出会っておられたその人は、当然、学生として進もうと思えば、それほど困難なことではなかったはずです。しかし、それにもかかわらず厳しい堂僧の道を選び、最も奥まった横川の道場においてひたすら念仏の道を深めていかれたところに、いかに人間として、仏道を求めるものとして、ひたむきに一すじの道を歩まれたかがうなずかれるのであります。

学習のねらい

1. 親鸞聖人の誕生と出家の周辺について、時代的背景、その人のころなどをみつめてみましょう。
2. 比叡山での聖人の立場をよく考えることによって、その求められたものは何かを確かめてみましょう。
3. 聖人の求道者としての苦悩と、「本願に帰す」と告げられた信心についてよく領解しましょう。
4. 聖人の信心の内容について、『親鸞聖人伝絵』や『歎異抄』のことばを通して深くたずねてみましょう。

※ここでは注釈とルビ（ふりがな）は省略しています。